

かかわり合いながら学んだことを積み上げる中で思考力・判断力・表現力を高める子ども — 小学5年「オリンピックの感動を再び！心に残った場面を表現し高め合おう」の実践から —

1 単元のねらい

動きを変える要素を分類・整理していく中で、伝えたい感じを表すためにはどのような動きの要素が必要なのか、加え積み重ねていくことで、動きを見る目を育て、自分の動きを高める。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

下記は昨年度の表現運動の中で、森や音楽のあふれる惑星を表現した際のふりかえりである。

<2時間目>ぼくたち（木グループ）の2枚の写真を比べてみました。木を表わそうとしたんだけど、手足の広げ方や、前の人じゃがむだけでも、こんなに感じがちがうことがわかりました。そこで、木の枝が広がる感じを表すために、一人一人気もちは同じにしてちがう動きを合わせてみました。動きを見合ったときに、「かくんと曲がってる枝やきれいにのびている枝があっていい。」「足や体がからまってて根や枝みたい。」とこの前は言われなかったことも言ってくれました。次は風にゆれる感じや生長もやってみたいです。

<3時間目>気もちはいっしょでちがう動きをゆっくりしました。見合ったとき、「あの（ビデオで見た他校の発表）速いやつやってみたら。」と言われたので早送りみたいのと遅いのをやってみたらのびていく感じが出てきました。反対の動きをいれると、確かにいい！

（児童 A）

始めは、6人で手足をのびし固まっている状態の木が大きくなるというものであった。そこで、導入時に使用した木の写真を見せることや、「枝がのびるのってどんな風に？根は？」と考えや動きを掘り下げ、「他の人たちがう形で。」と提案するなどはたらきかけたことで、手や足、体幹など意識した動きへと変わっていった。自分たちが表したい感じをどのようにすると表していけるのか、きっかけをつかんだことで、子どもたちの動きや声のかけ方は広がりを見せた。

また、表現運動発表会のビデオから対極の動きが含まれているものを紹介し、そのよさを子どもたちが見つけていったことで、対極の動きを取り入れていこうとする意識が芽生えていった。動きの視点を設けることで、その動きに集中して見ることができ、自分で動いて試してみようとしたり、よりよくするために互いにアドバイスをしたりすることができた。

本単元では、これらの動きのよさに気付き作品をつくっていった経験をいかせるようにした。表したい感じの特徴を表すことができるように、表現したいもののイメージを動きにして表す方法を明確にし、表したい感じをさらに表現していくことができるようにしたいと考えた。

(2) 本単元の内容と体育・保健体育科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて 表現運動において、動きを変える要素としては以下のものがある。

<変化の要素>

- ・時間性：速↔遅
- ・力 性：強↔弱 動く↔止まる
- ・空間性：高↔低（大小）前↔後（左右）拡大↔縮小（伸縮）（固↔離）

<連続の要素>

- ・急激的变化：急な変化、対比的な動き（強い変動によって力動的）
- ・漸次的変化：動きがしだいに変えられていく（滑らかで流動的）
- ・持続的連続：同じ動きの繰り返し（そのものの動きをもちこたえ安定的）

これらの要素をもとにした動きを組み合わせることで、表したい感じが強調される。また、個の動きに加えて、集団の動きを取り入れた動きにしていくことで、迫力を増すことができる。

本学校園体育・保健体育科として願う豊かな学びの姿として、「自分や仲間の姿を観察し、思ったことを言葉や体をつかって説明している姿」がある。そこで、本単元では、個人や、グループでつくりあげた動きを見合うことによって、表したい感じがより伝えるにはどうすればよいか、課題を見つけていく。そこから、よりよい表現を生み出していくために、これまでに見付けてきた動きを変える要素をもとに、言葉や動きで

アドバイスし合い、高め合えるようにしていく。試行や批評を繰り返し、学び合う中で、思考力・判断力・表現力を高め、願う姿に向かっていくことができると思った。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

① 動きを変える要素に視点を置いて、学び合う内容を焦点化する

対極の動き（変化の要素）のよさに感覚的に気付いている子どもたちの実態をふまえ、前述した動きを変える要素を意図的に取り入れ、表現していくことができるようにした。第1次ではロンドン五輪の様子（特徴的な動きの分かる部分を抜粋）をビデオで見ながら、自分がやってみたいものを少人数で思うままに表現してみる。その後、昨年の表現運動発表会のビデオから、伝えたい感じが伝わってくる動きのよさを見つけ、身体の部位の動かし方や変化・連続について分類・整理していく。整理した表をもとに、自分たちの動きにその要素を取り入れていたり、さらに見つけたよさを加えたりしながら、動きを高めていく。その中で、個や集団で互いの動きを見せ合いながら、動きのよさを見つけ、さらに動きが広がっていくようにする。

② 少人数の学び合いを大人数の学び合いにいかす

第2次では、種目の特徴をつかみながら動きを工夫していく。特徴を表すためには、スポーツの動きをそのまま真似をするわけではなく、変化の要素、連続の要素を加えることで表したい感じを強調させていくことが必要である。動きを分類・整理させていったものから、自分たちの動きに必要な要素は何なのか考え、話し合い、意図的に要素を加えて動いてみることで、表現していく。自分たちの表したいスポーツが、どのような動きの特徴をもっているのか、組み合わせることによって生み出される効果を感じられるようにしていきたいと考えた。

そこで、始めは、2,3人の小チームで、それぞれのテーマをもとに動きをつくる場面を設定した。少人数という話しやすい状況で試行と批評を繰り返し、動きを変える要素に視点を置いて学び合う。そうすることで、7,8人の大チームになったときも、学び合う視点がはっきりし、少人数で感じた動きを変える要素のよさをもとに、大人数でのダイナミックな表現をつくっていくことができる。このような段階を経ることで、集団の表現の中にも、同じような動きをしているようで、一人一人の個性のある動きも含んだ表現をつくり、状況によっては、主役と脇役に分かれて、表したい感じをさらに強調するような工夫をしていくことができると思った。

③ ペアチームを決め、毎時間見合うことで、表現の変化を感じ、伸びが見られるようにする

互いの表現を見合う際、ペアチームを決めておくことで、前回と比べて、どのような変化が表れてきたのかが分かる。どこがよくなったのか、より伝わるようにするためには、どうしたらよいのかなど、変化にこれまでの積み上げのあるアドバイスをすることができる。その際、付箋によかったところ、もっとよくするとよいところを書く。言われたアドバイスとその付箋をもとに話し合い、見合った後のチームでの学び合いを深めていくことができる。

3 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学び合い）
1	オリンピック選手になりきって、思い切り体を動かそう。	1 2	・ウォーミングアップでリズムにのって体を動かす（変化・連続の要素も意識して）。 ・動きのよさを見つけ、分類・整理していく。 ・ロンドン五輪の名場面の映像を見て自分がやってみたいものを表現してみる。 ・昨年の自分たちの表現を見て、動きの工夫を思い出す。 ◇互いに動きを見合いながら、表したい感じを表している工夫や、課題を見つける。
2	種目の特徴をつかんで表現の仕方を工夫しよう。 ・小チーム（2,3人）で ・大チーム（7,8人）で	3 4 5 6 7	・ウォーミングアップでリズムにのって体を動かす（変化・連続の要素も意識して）。 ・動きのよさを見つけ、分類・整理していく。 ・表したい感じを強調しながら、始め→中→終わりの一連の動きをつくる。 ・変化、連続の要素を意識的に加えて表したい感じをさらに強調する。 ・少人数の動きの工夫をもとに集団の動きを意識しながら7,8人で動きをつくる。 ・表したい感じをもとに対極の動きやフォーメーションを加えて強調する。 ・動きのつながりを意識しながら作品をつくる。

			◇伝えたいことを表現できるように、動きを見合いながら、加えるとよいものや、強調するとよいところなど見いだす。
3	校内発表、表現運動発表会をしよう。	8	・これまでの学習をいかして作品を発表する。 ・自分たちの発表や、他校の発表のよさを見つける。

4 授業の実際

(1) 動きを変える要素について系統的にとらえ、動きを具体化し、動きづくりのもととなるものを分類・整理していく

4年生までの学習で、対極の動きを取り入れることのよさを感覚的に感じていた子どもたち。それを具体的な言葉や動きにしていくと、どのような表現のよさがうまれるのか、発言やふりかえりからまとめ、毎時間の導入段階で前時の発見を紹介し、そのよさを価値付けていった。子どもたちは、それらの動きから自分たちの動きをさらによくするためにはどの要素を使うとよいのか、模造紙(図1)をもとに話し合い、自分たちの動きに取り入れていった。すると、子どもたちのふりかえりに下記のようなものが表れてきた。

「低→高」や「ちぢまる→のびる」などを応用した動き「低くてちぢまる→高くてのびる」をして、本物よりもすごいボクシングにしていきたいなあと思いました。(児童B)

バドミントンでCちゃんは力強く大げさにしていく。Dちゃんは、低く自分の限界まで体をのぼしてとれるようにする。私はしんぱんとして、スマッシュなどの羽根を指さしながらボールを(視線や指で)追いかけて、その表現にも体を大げさに使うことをしました。この三つを中心に加えるだけでけっこうわかりやすくなりました。さらによくならないのは、最初出てくる時に、本当に運動をして出てくるだけでいいのかを考えていきたいです。(児童E)

児童Bは、動きをまとめた模造紙をもとに、「高低」「伸縮」二つの要素を混ぜた「低くて縮まる→高くて伸びる」動きを生み出し、動きがさらに伝わるような強調された動きにしていっている。また、児童Dは、対峙する際、お互いの動きがより強調されるように、「片方が高ければ、もう片方は低くする」という逆の動きと、シャトルのスピード感を出すために、「動きは違っても、速い遅いの緩急をつけるところはタイミングを合わす」という同じ動きを組み合わせることで、より迫力を出していった。一人一人が状況によって動きを変えることで全体的に迫力のある表現を生み出していくことができた。子どもたちの動きやふりかえりを見ても、模造紙をもとに、意識して動きを変える要素を使い自分たちの表現したいものに合った、具体的な動きにしていっているのが分かる。

チームごとに表したい感じをとらえ、その動きが強調されていくように模造紙(図1)に立ち返り、必要に応じて自分たちの動きをビデオで見ながら、「もっと迫力を出すためにはどんな要素を使っていくといいのかな。」という提案するはたらきかけや、「どうするともっとスピード感が出るかな。」という掘り下げるはたらきかけを行った。すると、子どもたちは表したい感じが明確になり、「部分的にそろえる」や「前後」、「速い→遅い」の変化を用いて、迫力を出すための動きをつくり出していった。

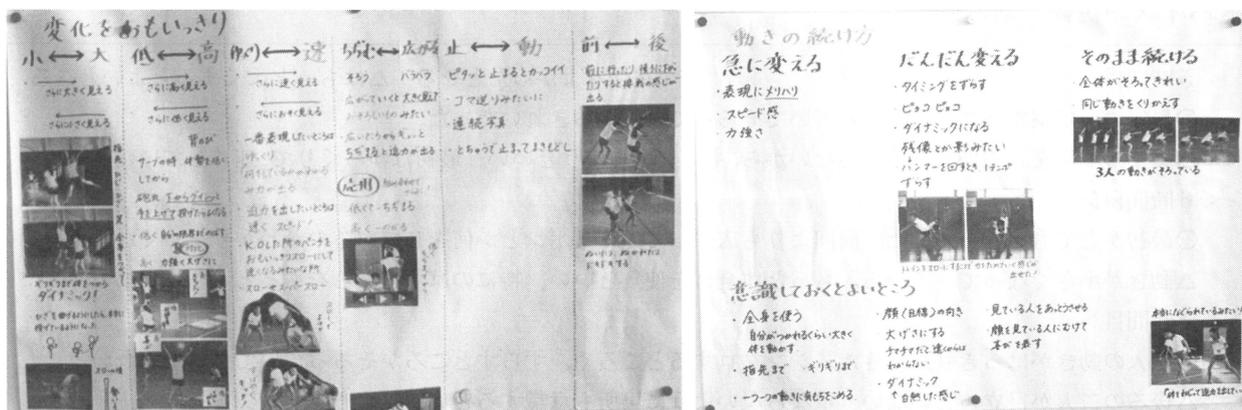


図1：子どもたちが見つけた動きを変える要素のよさをまとめた模造紙

(2) 小チーム（2, 3人）での動きづくりを大チーム（7, 8人）の動きづくりにいかす

先述した少人数での学び合いを通して、子どもたちがもっと人数を増やして表現をしたいという種目を、大人数での表現にしていった。大人数で表現をつくっている際にも、対極の動きについての意見を出し合い、タイミングを合わせたりずらしたりすることについても考えながら表現をつくっており、少人数での学び合いを大人数の時にもいかしていた。

そこで、「もっと〇〇な感じを出すためにチームの課題を見つけて、変化を加えよう。（〇〇には「危険」などチームで動きを強調するために表したい感じが入る）」というめあてをもとに大人数のよさを用いながら、迫力のある表現をつくっていくためにはどのような変化を加えていくとよいのか考えていった。以下は全体での学び合いの場面である。

T 1：カヌーチームがなかなか危険な感じが出せなくて困っているんだけど、どうしたらいいかな。みんな
でアドバイスしよう。

＜カヌーチームの表現＞

児童F：波におそわれるところをもっと大きさにしたらどうかな。

T 2：大きさにってどんなふうに？

児童F：転がるとか…

T 3：転がるだけでいいかな？

児童C：カヌーの人が後ろにジャンプしたらどう？スピードをもっと速くするとか…。

児童G：波が同じような感じがするから、小さい波がだんだん大きくなっておそってくるようにしたらどう。

児童H：手と足しか動いてないから体全体を使ってみるといいんじゃない。

T 4：どんなふうに体全体を使うといいかな。この瞬間の波をのりこえていく感じをやってみて。

児童H：＜実演＞波に突っ込んでいくときに体をぐっと縮めてこえたときにぐっと大きくしていく。

児童I：そのときに、一つ一つの波をずらしてよけていったらどうかな。

児童J：危険な感じが出てきた。

T 5：どうして？

児童J：こぐのが速くなっていく感じや、波が大きくなっていく感じがでてきたから。

T 6：こんな要素を使うとさらに迫力が出てきたね。自分たちの表現もさらに迫力が出るようにチームで練習しよう。

T 2・3・4・5のように、掘り下げるはたらきかけを行うことにより、子どもがイメージしている動きの工夫を具体的にし、全体で共有していった。次第にいろいろな考えが出てくるようになり、取捨選択しながら、より迫力のある表現へと変化させていった。

小チームで意見を出し合い、深めていった経験により、大チームになっても、一人一人が意見を出し、大人数のよさを出した迫力のある表現をつくっていくことができた。

(3) ペアチームによる見合いを行うことで学びの積み上げが見えるようにする

毎時間、同じペアで表現を見合うことにより、相手のチームの課題や改善点が見えるようになり、子どもたちの相手チームへの声かけに毎時間の積み上げが表れていた。下記は新体操チームへのアドバイスの抜粋である。

＜5時間目＞

※○はよかったところ △はもっとよくするとよいところ

○最後の所は集まってから広がっていてそろっていたからきれいだった。

△集まって何をしているかわからないから、もっと広く使うといい。最初はゆっくりで、速くしていくといい。

＜6時間目＞

○最初がとてもそろっていた。前回よりも広がっていてリボンとか何をしているのかわかりやすくなった。

△動きが小さくなっているから、もっと体全体を使うといい。特にのぼすところをもっとギリギリまで。

＜7時間目＞

○個人の動きがはっきりしてきた。シンクロするところや、ずらすところがそろっていてとてもきれい。

△後ろの二人が目立っていない。重ならないように場所も意識するといい。

5時間目には、新体操のボールを表現しようと輪になりボールを表した子をパスし合うような表現をしていた。しかし、「集まって何をしているのかわからないから広く使うといい。」というアドバイスから、3チームに分かれて表現をするようになった。分かれたことで一人一人が何を表現したいのかが分かるようになった。そこで6時間目では、新たな課題として動きの大きさが指摘された。表したい感じが表現できるように、新体操チームの子どもたちは、体全体を使うことを意識し、「高低」や「動く止まる」の動きを取り入れながら、より伝わる動きへと高めていった(図2)。

ペアチームからのアドバイスにより、自分たちの表現のどこがよくなったのか、そして新たに生まれた課題はどこなのかがはっきりすることで、チームで次に意識することが共有でき、表現したい感じを毎時間高めていくことができた。また、アドバイスをする側にとっても、毎時間の声かけに変化が表れていることから、どこがよくなったのか、さらによくするためにはどうするとよいのかという視点をもつことで、動きを見る目が養われていったことがわかる。

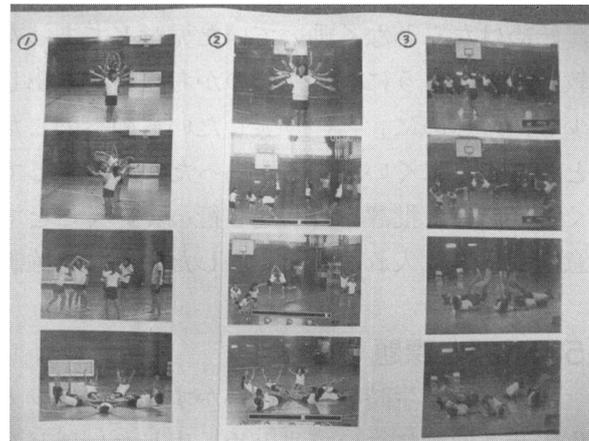


図2：表現の流れを4分割し、毎時間の変化が見えるようにしたもの

(4) 子どもの変容

技能面、思考・表現面について子どもたちが振り返り、それをもとに得点化したものに、教師の観点を加え、2軸のグラフに表していった。下記は、導入時、少人数終了時、大人数終了時における個々の評価をドットで表したものである。

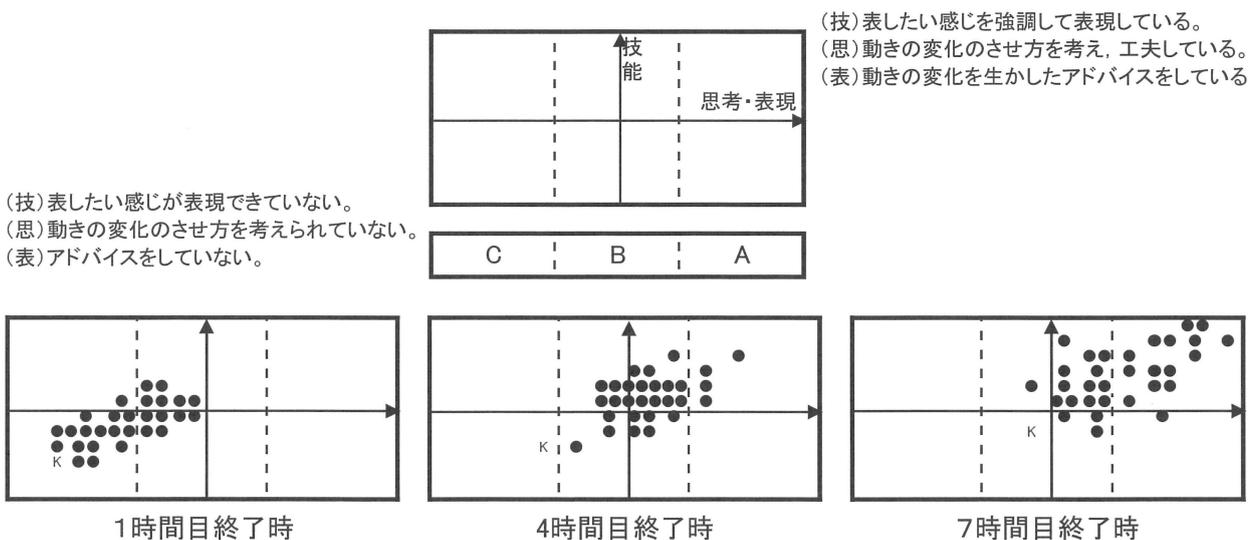


図3：技能、思考・表現面の変化の流れ

図3から全体的に技能・思考・表現が高まっていっていることが分かる。始めは抽象的な言葉かけが多かったが、授業が進むにつれ、先述してきたように、どのように動くか、かけ合う言葉が具体的になっていった。

技能・思考・表現面で、図3のような位置にあった児童Kも、次のようなふりかえりの変化が見られるようになった。

- ・今日は柔道でプロレスみたいだったけど柔道に近づいたからよかったです。 (1時間目)
- ・アーチェリーで最初はただ単に引いてうっていたけど、少し角度を変えてやってみるとけっこうそれっぽさがでてきたのでよかったです。 (4時間目)
- ・最初は上を向いて、ゆっくりやっていたけど、あえて少しだけ速めに見せたいところがよくわかるので、このままやっていくといいと思いました。 (7時間目)

始めはなんとなく動いていた児童Kであったが、動きを変える要素をもとにアドバイスされたり、教師がどのように表したいのか考えを引き出したりしていくことで、「少し角度を変えて」「あえて少しだけ速めに」という表したいものへのこだわりが感じられるようになっていった。実際の動きとして表れにくいところがあったが、意識して動こうとするだけでも伝わってくる感じは変わってくる。試行と批評を繰り返し行っていくことで、子どもたちの思考は深まり、動きを変える要素を意図的に取り入れながら、表したい感じを強調させて表現していくことができた。

5 成果と課題

今回、4年生時の学習をいかすことや、少人数の学びを大人数の学びにいかしながら、動きを変化させる要素についてまとめ、表したい感じを意図的に表現していけることをねらいとして行った。

図1にも表したように、授業の中で発見した動きを変化させる要素を、子どもたちが動きをつくっていく際のもととなるようにしたことが、子どもたちの思考力・判断力・表現力を高めることにつながっていったと感じる。それは、～をもとに整理を加えて具体的に示すことで、子どもたちにとって、「なんとなくこんなふうに動いてみよう」、「表したいけれど、どう動いたらよいかかわからない」ところからの動きづくりや話し合いの拠り所になったからである。実際に、自分たちの動きをよりよくしていくためには、この変化を使ってみるといいかもしれないと話し合い、試行と批評を繰り返し行った。そうしていく中で、話し合いや動きの出し合いがさらに活発になり、自分たちの表したい種目の特徴をとらえた、自分たちなりの工夫が随所に表れた表現にしていけることができた。また、まとめられたものが、伝えたいことを表すために自分たちがつくり上げ、周りから認められた動きであったり、周りのみんながつくりあげ、そのよさを感じた動きであったりしたことも、この動きを取り入れたいと感じた大きな要因である。ただ教師から「この動きがいいから使おう。」と与えられたものでは、子どもたちにこれほど浸透してははいなかっただろう。

そのために、子どもたちの考えが深まっていくよう、教師のはたらきかけが重要であった。動きを変化させる要素について、子どもたちの考えを掘り下げていくことにより、子どもの考えがより具体的になっていき、子どもたちの中でそれを意識することのよさが共有できるものとなっていった。また、少人数での学び合いを大人数での学び合いにいかした単元構成も、一人一人が動きづくりへのこだわりをもつことにつながっている。

今回は、動きを変化させる要素について、子どもたちの実態を踏まえて要素の一部を取り上げ、授業を構想していった。しかし、中には「動く↔止まる」のように、子どもたちにあまり浸透しなかった要素もあった。子どもたちの中で、この要素を使うことの必要感があまりなかったように感じる。その要因として、発達段階に適していなかったのか、今回の題材であるスポーツという特性に合っていなかったのか、教師のはたらきかけが機能していなかったのかを今後探っていきたい。そして、いろいろと考えられる。子どもたちが動きを変える要素のよさを感じ、表現していけるよう、発達段階に応じて精選し、積み上げていけるようにしていきたい。

(文責 小草 康弘)